



東京の会通信

No.222

2010年10月1日号
(毎月1回1日発行)

発行：公的骨髄バンクを
支援する東京の会
〒160-0005 東京都新宿区
愛住町23 Woody21-9F
TEL：03-3354-6377
(FAX兼用)



<http://www.marow.or.jp/tokyo/>
e-mail:marow_tokyo@yahoo.co.jp
定価 100円

骨髄バンク20年目の同窓会 「めぐりあえたことにありがとう」

9月11日、福島県の裏磐梯猫魔ホテルにて、骨髄バンク20年目の同窓会が開催されました。全国から約270人が集まり、夜には本イベントのメイン、患者とドナーの1000人の集いが開催されました。

参加者が事前に綴ったメッセージが紹介され、患者家族として東京の会の大塚さんがメッセージを読み上げました。

「今日は亡くなった息子も来ていると思います。」
そうです。参加者は270人でしたが、亡くなった方々を含めると、1000人は会場に来ていたと思います。目頭が熱くなると共に、ご子息への想いと共に日々活動されている大塚さんに対し、胸が熱くなりました。

そして、前々からサプライズがあると告知されていたのですが、なんと患者とドナーのカップリング大会が実施されたのです！！ もちろん希望者だけですが、会場は一気に感動の再会に向けて盛り上がり、期待に胸が膨らみました。私自身、ドナー経験者として、患者さんと奇跡の再会を果たした時の言葉を必死になっ

て考えながら、候補者名の発表を聞きました。

「まずはありがとうと伝えようか？ そして、財団の方から開示された患者さんの住所が両親の出身地に近かったことに、HLAのロマンを感じたことを話そうか？ 私の骨髄は、悪さをしなかっただろうか？ いや、何を話そうか？」などと考えている間に、名前が読み上げられないまま、発表が終わってしまいました。残念。結局、患者さんとドナーのペアは誕生しませんでした。

20年間の想いや感動のドラマ、笑いのエピソードなど、笑いあり泣きありの楽しい会となりました。いろいろな苦難を克服してこられた患者さんに、勇気をいただきました。気さくで心優しきドナーさんやいろいろな想いを胸に活動されているボランティアさんにエネルギーをいただきました。それと同時に、これからもより良い移植環境の実現に向けて、決意を新たにす一夜となりました。(保居)



ドナーと患者を紹介する陽田さんと大谷さん



「息子もここに来ています」と大塚さん

患者家族電話相談
白血病フリーダイヤル

やまいこくふく
0120-81-5929
毎週土曜日10:00～16:00

※第2・4土曜日は血液専門
医も相談に応じます。
※医師に言えない悩み事など
もどうぞ。

新宿西口と東口で骨髓バンクPR

●熊野神社例大祭に合わせて骨髓バンクPR活動

9月18日、新宿西口小田急ハルク前広場で、熊野神社例大祭に合わせてイベントが開かれました。今年の熊野神社例大祭は、約50年ぶりの13陸渡御が行われ、例年以上に盛り上がりを見せました。

この小田急ハルク前広場のイベントは、お祭りを盛り上げる一環として地元商店のプロの方たちが、焼き鳥や焼きそばなどを安価で提供し、金魚すくいや綿あめ作りなど子供にも楽しんでもらえるように、いろいろと趣向を凝らしています。その一角に、昨年同様、骨髓バンクPR及び献血の呼びかけを、新宿西口振興組合、西口商工会、新宿西口陸の協力を得て行われました。

当日、東京の会では東口献血ルームでの記念事業もあり、人手不足の中、町会の方たちが祭りばなてんに「骨髓バンクをよろしく」と書かれた黄色いタスキをかけて、駅前を通る多くの方たちに声をかけて下さいました。

そんな中、東京の会メンバーの湯原君は、昨年引き続き町内会の方たちに混じってお神輿を担ぎました。ねじり鉢巻きに法被姿で、顔を真っ赤にして新宿の町



西口ハルク前広場にて



東口献血ルーム前でPR活動

をねり歩く姿は頼もしい限りです。

大都会の真真中で地域の方たちとふれあい、交流し、バンクPRができたことは、新しい一歩だと思います。この出会いも大切にして続けていければと思います。
(大橋)

●東口新宿通りで献血・ドナー登録の呼びかけ

9月18日、新宿東口献血ルームで献血と骨髓バンクドナー登録のお手伝いをしました。一連の20周年事業の一環です。

午前中は東京の会会員5名、午後からは更に2名が加わって、都内でも名うての出入の多い新宿通りで大きな声で呼びかけを行いました。

新宿東口献血ルームは1日に300人ももの献血者が訪れる大規模な施設です。ドナー登録には十数名が申込書を記入して下さいましたが、登録者は4名でした。後日登録するよと言って帰られた方も数名いらっしゃいました。今後、更に献血ルームとの協力関係を深めていけば、工夫次第でもっと登録者を増やすことができると感じました。
(新田)

東京の会 「10月定例会」 のお知らせ

10月16日(土)午後5時30分より
会場：全労済東京・レインボー会館3階会議室
※新宿駅下車7分(新宿区西新宿7-20-8)
※西新宿駅下車1番出口徒歩2分
青梅街道新宿警察署さらやか銀行の角入ってすぐ右側
※11月定例会予定・11月20日(土)午後5時30分より
定例会は毎月第3土曜午後5時30分 から開催しています。

11月会報発送 「おりおり」 のお知らせ

11月6日(土)13時00分より
※13時までは品川運輸さんが使用されています。13時以降にお越し下さい。
場所：品川運輸・4階会議室(品川区東大井2-1-8)
JR大井町駅徒歩8分・京浜急行鮫洲駅徒歩2分
※今お読みになっている「東京の会通信」を約1000部折って封入して発送します。簡単な誰にでも出来る作業です。いつも人手が足りません。どうかご協力を。
※12月「おりおり」予定・12月4日(土)13時00分より

新しい方大歓迎です。お気軽においで下さい。お待ちしております。

新潟で財団が全国大会を開催

9月12日、新潟県新潟市で、骨髄移植推進財団主催の「骨髄バンク推進全国大会2010 in 新潟～命をつなぐチームプレー～」が開催されました。会場には、福島同窓会からバスで移動した面々も含め、約350人が参加しました。第1部では式典・感謝状贈呈のあと、最後に上越市在住の斉木翔太君が「患者からのメッセージ」を力強く読み上げました。メッセージの前には翔太君の闘病生活を記録した映像も流されました。厳しい治療を乗り越え、ドナーさんからもらった骨髄で健康を取り戻し、大好きな野球に打ち込める喜びと、ドナーさんへの素直な感謝の気持ちが伝わり、会場内は感動に包まれ、私も目頭が熱くなりました。

第2部は新潟ジュニア合唱団の歌に続き、アルビレックス新潟の内田潤選手、プロスノーボーダーの荒井'daze'善正さん、マラソン選手の深尾真美さんの3人のスポーツ選手が登場し、県立がんセンターの廣瀬貴之先生を交えて、「命をつなぐチームプレー」をテーマにトークショーが行われました。司会は翔太君のお

母さんで今大会の実行委員長の斉木桂子さん（骨髄バンクサポート新潟理事長）でした。荒井さんが患者の体験、深尾さんがドナーの体験を語り、内田選手が感想を述べたり質問をしたりしながら進行し、ドナーだけでなく、患者家族、医師、ボランティアなど様々な人々のチームプレーで命が繋がっていく、骨髄バンクの原点を再認識することができました。

なお、大会に先立ち、午前中に地区普及広報委員の研修会が開催され、非血縁者間末梢血幹細胞移植（PBSCT）の開始について説明がありました。出席者からは様々な質問が出され、最後は時間切れで終了した形になりました。短時間の研修でもこれだけいろいろ出ると考えると、財団にはさらに丁寧な対応を求めるとともに、出された意見・質問を率直に受け止め、PBSCTの導入・実施に向けて万全を期してもらいたいと思います。なお、11月以降、説明員を対象に全国でドナー登録受付時の対応などの研修会が開催されることになっています。（二見）

CML患者負担金軽減について都議会へ陳情

東京の会では全国協議会会長大谷貴子さんの手配で予約していただいた都議会民主党懇談会に2010年9月8日午前中に、大谷さんと東京の会メンバー6名で参加しました。午後には都議会公明党ヒアリングに4名の東京の会メンバーで出席しました。

今回は請願内容を「グリベック服用患者さんの高額療養費制度での自己負担限度額を1万円とする」ことの1点に絞り、都議会として国へ働きかけを行って欲しいとお願いしました。

慢性骨髄性白血病CMLの治療がグリベックの出現により画期的に変えられました。従来標準治療に使われてきたインターフェロンと比較して副作用が少なく、服用を続けている限り寛解が維持され、米国血液学会の2008年の研究で7年生存率が、インターフェロン36%に対し、グリベックでは86%となり、患者さんにとって夢の新薬なのです。

わが国では2001年11月にCML治療薬として承認され、現在約8000人の患者さんが服用しています。

この夢の新薬にも大きなネックがあります。薬価が高いのです。今年4月から1錠2749円に改訂されま

したが、標準治療に1日4錠の服用が必要で、3割負担の健保適用を受ける標準所得者の負担は1ヶ月に99,000円、高額医療費適用後の自己負担金は1ヶ月44,000円、年間533,000円となり、これが生涯続いているのです。患者さんの家計は薬代に押しつぶされています。

昨年、この状況を打開すべくCML患者会の皆さんが8万6千筆の署名を携えて外添厚生労働大臣(当時)に請願を行いました。その趣旨は高額長期疾病(特定疾病)に係る高額療養費の特例を適用して、患者の高額療養費制度での自己負担限度額を1万円として欲しいというものでした。今年4月に薬価の引き下げがありました。請願は実現されていません。

CMLに限らず、骨髄移植を受けた患者さんはGVHDや合併症の治療に種々の薬剤を服用してその副作用や薬価負担に苦しんでおり、安定した仕事を得られず経済的にも苦勞されているケースが多々見られます。このような事例についても取り組み、問題提起を行っていく必要性を感じます。（新田）

ご寄付と会費の納入、そして絵はがきや書籍・テレホンカードの購入は郵便振替にてお願いいたします。
皆様からの善意をお待ちしております。

郵便振替口座番号

00100-1-555195

加入者名義

公的骨髄バンクを支援する東京の会

20年目の挑戦!

宮城 じゅん さん

2010年11月6日。私は9年ぶりに成人式を迎えます。

「いったい何を言っているの?」と思われるかもしれないので説明しておきますと、私は1989年、7歳のときに慢性骨髄性白血病と診断され、翌年の90年11月6日に兄から骨髄をもらいました。移植後はまったく順調というわけではなく、GVHDや感染症で何度か入退院もありました。

移植後の生活で、特に私が辛かったのは大幅な体力の低下でした。中学生になると同級生との体格差は広がる一方。体育の時間で個人競技は良いのですが、リレーや球技の団体競技になると、足を引っ張るからとなかなかチームに入れてもらえず、嫌な思いをすることも多かったです。もともと運動することが好きだった私にとって、体力低下のショックは大きく、精神面も弱くなっていきました。

何とか体力をつけようと、筋トレしてみたり、ランニングをしてみたりしましたが、腕立や腹筋は一回もできず、走っては500mも走ると心臓が飛び出そうなほど苦しくなり長続きしませんでした。しかもその後は決まって激しい筋肉痛に襲われて動けなくなり、運動後は免疫力が大きく低下する為、すぐに風邪をひいて寝込み、更なる体力低下を招く悪循環となりました。

この悪循環を何十回と繰り返し、私は普通の生活をするのにさえ自信をなくし、だんだんと鬱になっていきました。高校へ進学してからは、体力面以外にも、自分の体の成長のことで大きく悩み始めました。親にも成長期はいつごろ来るのか相談したりはしましたが、決まって返ってくるのは「小さい頃に大きな治療したから、周りの子よりちょっと遅いかもね。」と、いう言葉でした。当時の私は自分の病名は知っていましたが、全身放射線照射、骨髄移植などが体に及ぼす影響などは全く知らなかったのも、この言葉を信じるしかありませんでした。やがて様々な不安に押しつぶされた私は、不眠症になったり、電車も扉が閉まった瞬間に急に過呼吸になって意識がたもてなくなったり、バスに乗るときなど列に並んだりするだけで猛烈な吐き気に襲われたりなど、普通では

考えられないような症状がでるまでに神経が弱っていきました。

日常生活にさえ自信をなくした私は、普通の生活を取り戻したいと思うようになりました。不安症が出たときには決まって意識が遠のきそうになります。そのためちょっと辛めのガムや、醤油せんべいなどを持ち歩くようになりました。効果は思ったよりあって、辛い刺激やお醤油の香ばしい香りが私の気持ちを引き締めて癒してくれました。

最初のうちは症状が出ると周りを気にしながらコソコソとガムやお煎餅を口にしていました。やがてはそれを持ち歩いているだけで、「症状が出てきてもこれがあるから安心」と、いう気持ちが生まれ、前のように外出ができるようになり、日常生活が送れるようになりました。

私の不安症で一番の薬になったのは、「自信」でした。外出できる自信がついた私は、最初は近場の観光地から一人旅を楽しむようになりました。そして徐々に遠くへ行きたいと欲も出るようになり、気がつけば夜行バスで12時間の移動や、青春18切符で片道24時間の旅行などができるまでに気持ちも体も元気になっていきました。

今から5年ほど前、私は「もの木」という血液患者会に出会いました。私自身過去の病気のことを知りたく、同じような経験をされた患者さんたちと話してみたいという気持ちが強くありました。当時私はすでに主治医からも「完治」の言葉をいただき、通院も薬も無く、健常者と同じ生活ができていました。初めて参加した患者会の自己紹介でそのことを告げると、参加者の方から「この病気って治るんですね。」と、声が上がりました。私自身病気が治っていたので気になりませんでした。この時始めて白血病の世間の印象を知りました。

映画やドラマなど、白血病をテーマにした作品が多くなり、「白血病」という言葉は世間にも広がっていきました。しかし、「白血病」の印象は重く、「白血病＝死の病」というイメージが強く、当然患者さんたちにもその思いがあり、「辛い治療しているけれど、本当に良くなるの?」という疑問は強かったそうです。

患者会の帰り際、一人の患者さんから「今日は白血病が治る病気だとわかって希望が持てました。ありがとうございました。」と、お礼を言われました。私は自分が病気だったことが誰かに力を与えられるなんて思ってもみなかったので嬉しくてたまりませんでした。

この日を境に、私は自分が白血病で骨髄移植をしたことを隠さないようになりました。ずっとこのことは自分のマイナス点になってしまうのではと、周りには打ち明けてはいませんでした。逆に、「私は白血病だったけれど、骨髄移植をしてこんなに元気になったんだよ。」と、知ってもらいたいと思うようになりました。そして私は3年前からマラソンを始めました。移植後、体力の低下、成長障害などで運動はまるっきり苦手でした。でも、私自身「移植をして元気になって、これから始められることがたくさんあるんだよ」と、いうことを証明したいという気持ちが生まれたからです。

最初の目標は東京マラソンの10km部門でした。半年前から練習を始めましたが、最初の練習では800mで息が切れてまともに走れませんでした。私の体は成長障害で内蔵機能もあまり良くなく、毎年のように肺に穴が開く気胸になり、骨は弱く、とくに膝関節は1～2km歩いただけでも骨が削れるような激痛で歩行すらまともにできない状態になっていました。しかも無理に練習をしていると、当然免疫力が下がり風邪をひいてしまい、せっかくつけた体力が無駄になってしまう始末。これは何とかしなくてはと、練習メニューを一新することに。まず、第一の目標にあげたのは、「風邪をひかない」こと、移植後の私の経験で、体力を一番早くつけるのは、筋トレでもランニングでもなく、いかに長期間風邪をひかずに日常生活が送れるかということでした。ランニングも毎日ではなく、疲れが完全に取れるように3日に1回のペースに変更。膝の痛みを克服する為に、軽いスクワットで膝周りの筋肉をつけることにしま

した。

本当に制限時間内に完走できるのか？不安も大きく残った大会当日でしたが、スタートしてしまえばあまりのお祭り騒ぎでそんな不安もどこへやら。ゆっくりのペースで走り、そして疲れきる前に歩きに変更したりなど、周りの走りに惑わされずに自分のペースをしっかりと守って、10kmマラソンを見事に制限時間内に笑顔で完走できました。マラソンを走り切れたことは、私にとっても大きな自信になり、マラソンを続けていきたいという気持ちになりました。

今まで私は、5都道府県で10回ほど大会に出場してきました。そして、沿道に応援に来ている方、ランナーの方に、少しでも骨髄バンクのことを身近に感じてもらえるようにと、襷をかけ、自作の「骨髄移植しました！」と、胸に大きく書いたTシャツを着て走りました。思いのほか効果は大きく、特に毎回最後尾を走っている私には、沿道や折り返してきたランナーからも「骨髄バンクがんばれ！」と、声をかけてもらえることが多く、去年の東京マラソンでは、血液内科の看護師さんがランナーで走っていて、「明日早速患者さんたちに元気になれるってことを教えてあげます！」と、声をかけてもらい、これは私にとって一番の思い出になる言葉となりました。

骨髄移植から20年。20歳になった私は、私なりの方法のマラソンで、骨髄バンクの普及を後押しできたらと思います。何年かかるかわからないですが、全国47都道府県のマラソン大会に出場し、実際に骨髄移植をした私を見てもらうことで、多くの方の今まで「0」だった骨髄バンクへの関心を、「1」にしていくことができたらと思います。

20年目の挑戦！47都道府県マラソン走破のスタートとなる大会は、ちょうど20年前に骨髄移植が成功して無菌室を出られた日と同じ12月12日。場所は宮崎県、国際青島太平洋マラソン、部門はハーフマラソンです！

日本骨髄バンクの登録患者と検査済登録ドナー
(平成22年8月末日現在)

	ドナー(全国)	ドナー(東京)	患者(全国)
登録者累計	366,824	52,469	31,003
8月登録分	3,297	433	227
8月抹消数	1,097	140	—
実質登録増	2,200	293	—

患者とドナー登録・適合状況(8月末日現在)

ドナー登録受付者数(累計)	474,253人
ドナー登録抹消者数(累計)	107,429人
有効二次検査済ドナー数	366,513人(8月2,208人増)
二次検査適合ドナー数(累計)	227,885人
実質登録患者実数(現在)	2,760人(国内1,395人)
HLA適合患者数(累計)	25,222人(患者累計数の81.4%)
非血縁移植実施数	12,102例(8月実施105例)

11月10日 第19回ピアノ三重奏の夕べ

恒例となりました、サンクト・フローリアン・ピアノ三重奏団によるチャリティコンサートが今年も開催されます。演奏仲間が白血病を発症したのをきっかけに毎年行われてきたこのコンサートも、今年で19回目を迎えます。一流の演奏を気取らずに聞ける良い機会です。普段クラシック音楽にあまり馴染みがない方も、是非お気軽にお出で下さい。

日 時 2010年11月10日 (水) 19:00開演 (18:30開場)
場 所 めぐるパーシモンホール 小ホール
東急東横線「都立大学駅」より徒歩7分
東急バス「めぐろ区民キャンパス」バス停を下車してすぐ
(詳しくは同封のチラシをご覧ください)
料 金 一般2,900円 学生1,000円 (全席自由席)
演奏曲目 ヴィヴァルディ：トリオソナタ ハ短調
ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲 第5番ニ長調 作品70-1
ラヴェル：ピアノ三重奏曲

東京の会20周年記念講演会

東京の会20周年を記念して下記の通り講演会を開催致します。

日 時 2010年11月20日 (土) 14:00～
場 所 田町交通ビル6階ホール (JR田町駅東口徒歩3分)
プログラム プロジェクトX 上映
「決断 命の一滴～白血病・日本初の骨髄バンク～時代の証言者たち」
出演者 大谷貴子さん (全国骨髄バンク推進連絡協議会会長)
荒井daze善正さん (プロスノーボーダー)
原 千晶さん (女優タレント)

東京ドナー登録会予定(10月)

10月15日 (金) 瑞江駅北口・南口 (江戸川区)	10月25日 (月) 汐留ビル (港区)
10月17日 (日) 板橋市民まつり (大山公園) (板橋区)	10月26日 (火) 汐留ビル (港区)
10月20日 (水) 赤羽駅東口 (北区)	10月28日 (木) 葛飾区役所 (葛飾区)
10月20日 (水) 大田区大森西特別出張所 (大田区)	10月31日 (日) 新極真会 (東京体育館) (渋谷区)
10月21日 (木) 荒川区役所 (荒川区)	

東京の会10周年記念出版

『もう一人の私』

患者とドナーからのメッセージを中心に、骨髄バンクの10年を東京の会通信の視点でつづる評判の一冊。
本屋さんでは取り扱っていません。
あなたもお読みください。



お申し込みは

東京の会へ

売価：1500円

送料：300円

10冊で12,000円 (送料込)

心のこもったご寄付ありがとうございました。(2010.8.16~9.15)

八戸 信昭さん 1,000円/石崎 保夫さん 5,000円/匿名 4,010円

お寄せいただいたご寄付のうち、会費未納の会員からは会費(年3,000円)を差し引いて掲載させていただきました。



▼福島県裏磐梯の檜原湖畔にある猫魔ホテル。このリゾートホテルを貸し切り、患者とドナー1000人を集めて大同窓会をやろう、という何とも壮大な企画を考えたのは、福島県骨髄バンク推進連絡協議会運営委員長の陽田秀夫さんです。陽田さんは全国協議会元運営委員長で現副会長、財団でも常任理事を務めたことがあり現在は評議員、さらに同窓会翌日の財団全国大会では、日本さい帯血バンクNWの副会長として来賓席にいたというマルチな活躍をされている方です。

▼それにしても、全国から患者とドナーを1000人集めよう、そのためにホテルを借り切ろうというその発想が並ではありません。さらに「そんなことは無理だ」「無謀だ」という声を押し切り、「絶対にやる」と信念を貫き通した熱意と、周りを巻き込み引っ張っていく強いリーダーシップには敬服します。頭も切れ、時に相当きついことも言いますが、福島弁のぼくとつなしゃべり方のため悪くとられず、同様に舌鋒鋭い東京の会顧問の野村正満さんは「陽田さんはずるい」と常々こぼしています。

▼この企画は陽田さんが長年暖めてきたもので、福島の会では以前からこの企画のために資金を積み立ててきました。今回、全国協議会設立20周年記念行事の一環として、全国協議会の主催、福島の会が主管という形で実施されることになりましたが、実際には資金面をはじめ企画・運営など全面的に福島の会が担っており、全国協議会は周知活動や申し込み受付、当日の手伝いなどのサポートが中心でした。企画もよく練られていて、全国から人を集めるために、遠隔地からの参加者への交通費の補助や貸し切りバスの運行など、さまざまな工夫とお金が掛けられていました。

▼そしてついに9月12日当日を迎えました。1000人というのは話半分として、500人は集めたいと陽田さんは言っていましたが、実際の参加者は約270名でした。この中には、ボランティアや医療関係者なども含まれています。それでもすごい人数だと思いますが、そもそもなぜ1000人を目標にしたのか。骨髄バンクを通じて行われた骨髄移植が1万例を超え、1万組以上の患者とドナーのペアができたこととなります。1000人というのは、その1割を集めたいということです。では

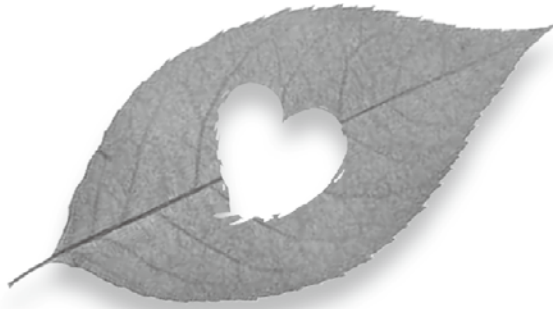
何のために？たくさん患者とドナーが集まって感動を分かち合うためというだけではありません。その真のねらいは、メインの企画である「めぐりあえたことにありがとうの集い」で明らかになります。

▼お察しの通り、それは患者とドナーの対面です。参加申し込みの際、患者とドナーは移植(提供)時期を、○年○月まで申込書に記入していました。それを事前にチェックし、時期が一致している患者とドナーをリストアップしていたのです。そして「集い」の場で、その2人を呼び出し、相手の情報(男女・年代・血液型等)と日付を言わせて、合っているかどうか確かめたのです。ペア候補が呼び出されるたび、会場は期待に包まれました。しかし残念ながら今回はペアは見つかりませんでした。でも、もし1000人、いやその半分の500人の患者とドナーがいたら、もしかしてペア誕生の瞬間が見られたかもしれません。

▼対面は実現しませんでした。呼び出された患者とドナーが別れ際に握手をしている姿は、おたがいに「元気でよかった」とエールの交換をしているようで、見ている方もうれしくなりました。ドナーにとっては、元気になった患者さんに会えることが何よりうれしく、自分のしたことの意義を再確認できる機会でもあります。患者にとっても、ドナー体験者に会うことは、自分のドナーに重ね合わせて「ありがとう」と言える貴重な機会なのです。骨髄バンクの素晴らしさは、助け合い、ともに生きようとする人と人との心のつながりにあるということ、あらためて感じました。

▼この大同窓会の告知は、財団のバンクニュースにも掲載されました。残念ながら当日財団関係者で姿を見かけたのが、財団を解雇され和解で職場復帰したばかりの山崎氏だけだったことです。翌日が新潟の全国大会だったので今回はやむを得ませんが、ぜひあの場の感動をもっと多くの財団役職員に味わって欲しいと思います。財団関係者にとっても、自分の仕事の意義を深く理解するいい機会になったはず。

▼来年は財団も20周年行事を企画しているようです。20年経って、約36万人のドナー登録者と年間1000例を超える移植が行われるようになり、非血縁者間末梢血幹細胞移植の導入など新たな展開もあります。患者救済のため、さい帯血バンクを含めた造血幹細胞移植システムがより安定的かつ効率的に機能するためにはどうしたらいいのか、これまでの延長線上ではなく、大きな視点で見直していくいい機会だと思います。来年の財団の全国大会が、よくあるつまらない周年行事に終わらないことを今から期待したいと思います。(s)



一人でも多くの命を救いたい・・・

D N B

DNBとは「ドナー・ニーズ・ベネフィット」(骨髄ドナー給付)の略称で、白血病などの血液難病患者に骨髄を提供するための手術を受けたドナー(骨髄提供者)に対し、手術給付金をお支払いするサービスです。プルデンシャル生命が2005年4月に日本で初めて開始しました。このサービスは、ある一人のライフプランナーの、「血液難病と闘う患者さんに何か救いの手を差し伸べることはできないだろうか」という思いから実現に至りました。

プルデンシャル生命は、一人でも多くの方が骨髄バンクに登録し、その結果一人でも多くの血液難病患者の命が救われることを願っています。

プルデンシャル生命保険

〒100-0014 東京都千代田区永田町2-13-10 プルデンシャルタワー
ホームページアドレス <http://www.prudential.co.jp/>
カスタマーサービスセンター 0120-810740



Prudential